

これまでの会議で出された主な意見

（考え方について）

- ・「こういう子供たちを育てたい」というビジョンのようなものがまずあって、いつでもその原点に戻れるような、委員のみんなが共有できるような体制が必要なのではないか。
- ・子供たちが学校に行きたいという気持ちを醸し出すような、そういう夢のある学校配置を考えていかなければならない。
- ・「これでは駄目だ」ということがはっきり分かれば次のステップに進めるのかもしれない。
- ・自分の価値観を出し合っているだけでも議論が進まない。一般的な子どもたちが望むことの視点も持ちつつ、普通の子が幸せな学校生活を送れるような規模にしていきたい。
- ・いじめを受けていたり、不登校の子の保護者は少数派かもしれないが、そういう少ない意見も分析しなければならない。
- ・子どもが高校生になり、社会に立ってから将来にわたる利益を考えた中で結論を出していかなければならない。

（適正規模について）

- ・今の6年生に比べ1年生の人数がかなり少なくなっているので、適正規模を考える際は、現状の規模を基準にするよりも将来の推定数を基準に考えるべきではないか。
- ・単学級は子供にとってすごい負担で、人間関係に行き詰ってしまうと、その人間関係から抜け出せなくなってしまう。文科省が出している国の基準、適正規模という数字は、決して行政の都合だけではなく、子どもを健全にたくましく育てていく規模という一面もある。
- ・学校の理想としては、複数の学級を持っている学校を構築し、子供に対して質のいいサービスを提供していくこと。
- ・単学級はコミュニティが1つしかなくなり、逃げ場が無くなってしまおうと思う。

（適正配置について）

- ・学校と学校を一緒にしたときは、スクールバスを出すのか、そのお金は誰が出すのかなどの細かい問題が出てくる。
- ・学校を合併したとすると当然学童も合併することになるが、学童は定員が一杯となっており、合併したがために入れなくなる場合もあるのでその辺も考えてほしい。

（学区について）

- ・例えば、川奈小は人数が少ないが、指定校変更制度で南小に行っている子どもも多く、そういった子が学区どおりに川奈小に戻ることで解消されるのではないかな。
- ・松原は中心市街地であるが、後継ぎとなる子どもたちは郊外で生活しているため、指定校変更制度により西小学校に通っているようなケースが多い。これが特例の形でなく自由にしてよければ、もう少し各学校の人数のバラつきも無くなってくるのではないかな。